



二宮にのみや尊徳そんとく
(二宮金次郎)

平成十一年の早春、タニサケの松岡さんと一緒に、神奈川県小田原市の二宮尊徳記念館・生家を訪ねました。館長さんが親切に案内してくださいました。

二宮尊徳は本名を金次郎と申します。たきぎ薪を背負い本を読みながら歩いている銅像は、戦前には全国すべての小学校の校庭にあり、二年生で「二宮金次郎」という唱歌も習ったので、みんながおなじみの人物でした。

幼いとき洪水で田畑が流失、苦労のため父も母も亡くなっています。金次郎は、親戚しんせきの家にやとわれ、朝は四時から起きて働き、夜はおそくまで読書や習字に励みました。

あの銅像の姿は、そのころの金次郎少年をあらわしたものです。十五年の努力を積み重ねて、かれはみごとに二宮家を復興ふっこうしました。

金次郎がその苦闘のなかで、経験から学んだのは「分度と推譲」という考え方でした。分に從つて度を立てる——自分の将来や子孫のために、多少でも余力が生ずるように、生活の限度を立てるということです。

例えば三十万円の収入であれば、十五万や二十万くらいで生活するのが、自分の「分」と考え、残りを将来のため積み立てていくわけです。

「推譲」とは、人に譲る、人の身をわが身と思う、他人へのいたわり、思いやりであります。物も金も他から奪おうと欲すれば自分から離れていく、どうぞあなたからお先にと譲るようにしていると、自然に物も金も自分に集まってくる、という意味です。

この考え方をすすめた金次郎は、やがて小田原藩の家老服部家から頼まれ、その家の経済を立て直し、さらには藩主大久保忠真公の依頼で、荒れ果てていた桜町領の財政を再建します。

農民の出身でありながら、ついには幕府の仕事までまかせられ、道徳を基本に

おいた経済政策の実践家として、今日にいたるまで、日本全国に大きな影響を及ぼしている人物であります。

占領軍ですら「二宮はジャパニーズ・リンカーン。日本の生んだ最大の民主主

義者。世界最初の信用組合の創設者」とほめたたえたほどです。

尊徳の有名な道歌（道徳的な教訓を含んだ和歌）があります。

「父母も　その父母も　わが身なり　われを愛せよ　われを敬せよ」
ちちはは　そのちちはは　わがみなり　われをあいせよ　われをけいせよ

五七五七七の和歌ですから、声を出して読むとき「ふぽ」ではなく「ちちはは」と読んでください。

私という人間には父母がいて、その父母——つまり祖父母がいて、さらにその上の祖先がずうつといて、そのすべての父祖が私という人間のなかに生き続けておられる。それが私というもの、だからその尊い存在である私をたいせつにし、敬愛しなければならぬ。同時に他の人も同じくそういう尊い人間なのだから、お互いに愛し合い、敬し合っていこうではないか。

人間の、生命の尊嚴そんげんということを、わかりやすく、具体的に説といた道歌です。
私が開校準備から初代校長を勤めた高校では、校訓を「敬愛」と定めたので、二宮尊徳のこの教えを、機会あるごとに生徒諸君に話しました。

安政三年（一八五六）七十歳没

○ 私が小学生（温知小）の時には、校庭に金次郎さんの銅像がありました。
しっかりおぼえています。

○ 再建の達人の二宮尊徳に学ぶ。

「朝は早く起きる。生活の限度を立てる。人に譲る。父母を大切に、夜はおそくまで勉強をする」

（M生）